



猫 養 通 信

第 56 号

平成 16 年 (2004)

7 月 21 日 発行

(年 4 回 発行)

猫養作品集と校合

青木秀樹

「猫養作品集十四」を明雅先生のご霊前に捧げることができたことは、猫養会会員の健在を示すものとして喜ばしいかぎりである。今回も新たに作品を発表する会員があり、猫養会会員の作品への意欲向上の証として、先生にも喜んでいただけるであろう。

しかしながら、今回の作品集編集において、怠りがあったことを、私はいま強く反省している。これまで主に明雅先生がなさっていた作品の事前チェックを、会長・副会長と編集責任者の梅田利子さんで行う体制をとり、昨年十二月にそれぞれ作品チェックに尽力したが、見落としがいくつも残ってしまった。

時間が限られる中で、いくつもの誤りを修正したが、それでもなお「かな遣い」の誤り、発句同字・同字三句去り、時分三句去り、か

な留め五連続など「式目違反」の誤りが二十余件残ってしまった。誤りはかならずしもキヤリアの短い方ではなく、ペテランクラスの方にも多いことが誠に残念である。きわめて見苦しいことであり、明雅先生に合わせる顔がないというのが今の心境である。

今回の誤りを正すために、次回からは事前の作品チェックに十分時間をとること、そのために応募締め切りを早めて厳守することにするが、一方、会員各位に応募作品の校合をしつかりしていただくように要請したい。このところ、校合をなおざりにする傾向が会員の中にあるのではないかと心配である。

一巻を首尾した後、捌きがすべきことは校合である。どのように注意していても実作の場では障りや誤りを見落としてしまうことはある。校合は「鉋をかける」と表現されるように、一巻を仕上げる上で重要な作業であって、文芸作品として完成度を高めることが大事である。

「校合の一般的な手順」

- ① まず全体を見渡して形の上のチェック
 - ・ 発句同字、季節の句数のチェックなど
- ② 部分のチェック
 - ・ 発句 形式を踏まえているか
 - ・ 脇句 同時同場になっているか
 - ・ 第三 発句・脇からの転じが十分か、大山
 - ・ 体・小山体・杉形になっているか、「て、

に、にて、らん、もなし」の留めになっているか、中七が胴切れになっていないか
平句 付け味の悪いところがないか、去嫌が守られているか、自他場の打越がないか、シマになつていないか、恋句の趣向に変化があるか、新旧のかな遣いが混じっていないか、短句の下七に二五、四三がないか、発句・ウ・ナオ・ナウの折立が同じ趣向になつていないか、など

③ 全体の内容のチェック

・ 序破急があるか、「文」と「地」のメリハリが利いているか、面白すぎないか、一巻全体に変化があるか、など

捌きは一巻に責任がある立場なので、先輩の句に手をいれたら失礼になるなどと考えずに、しっかりと校合することが必要である。疑問に思うところは連衆の意見を十分に聞き、それを取り入れることも大事なことである。

明雅先生は「鉋のかけ方が不足気味」の作品が多いことをしばしば指摘されていたが、今回の猫養作品集編集にあたって、そのことが実感された。

しかし、式目に適っているだけではよい連句作品とは言えない。「世態人情諷交詩」としての新しさ、玉が転がるような展開が重要なことはいまでもない。おたがいに、明雅先生に指導された連句を、楽しみつつ、より質の高い作品を目指したいものである。

猫蓑会式目の整理 東 明雅

従来、猫蓑会には式目は存在したが、それを整理した式目表とでも言うべきものはなかった。唯一、「二十韻季題配置表」のカードの裏にある「句数式付去嫌」・「式目歌」はその代用であったが、近頃、その不備を痛感するようになった。

たとえば、「式目歌」の第一首「衣季や竹田の船路夢泪月松枕五句隔べし」などは、古い連歌の時代からの伝統を残したものであるが、現代人には意味も理由も分からぬだろう。それで、現在猫蓑会で使っている式目類を整理して一覧表にしたが、左の通りとなった。式目を新しく制定しようなんて大それた考えは毛頭ない。従来我々がやって来た方法を整理したまでである。大方のご参考になれば幸いである。

猫蓑会式目

一 心得

式目は翁の「歌仙は三十六歩なり。一歩も後に帰る心なし」を旨とし、すべての事象が輪廻にならぬよう注意する。

二 句数

1 句数は春秋三句より五句(普通三句)、

三 去嫌

夏冬一句より三句(普通二句)とし、季戻りを嫌う。
2 恋句は二句より五句続く。一句で捨てない。

1 同季春秋は五句去り、夏冬は二句去り。その他、月・夢・涙など特に印象の強い文字は五句去り。

2 同字・神祇・釈教・恋・無常・述懐・懐旧・妖怪・病体・時分・夜分は三句去り、その他の題材は二句去りであるが、なるべく同じような題材は離して用いるようにする。

3 人情自、人情他、人情自他半、人情無(場)の各打越および編を嫌う。

4 片仮名・アルファベット・数字の打越を嫌う。

四 一卷の構成

1 発句は当季とし、切字を入れる。

2 脇句は発句と同季、同時刻、同場所とし、体言止めが普通。

3 第三は「て、に、にて、らん、もなし」止めが普通。

4 発句使用字(月、花を除く)、及び恋の字は一卷再出を嫌う。

5 発句以外に切字「や、かな」を嫌う。
6 表に神祇、釈教、恋、無常、述懐、

懐旧、妖怪、病体、人名、地名を嫌う。但し発句はこの限りではない。

7 月の定座はオ五、ウ七、ナオ十一(二十韻ではウ一、ナオ五)とし、場合によって引き上げることもこぼすことも自由であるが素秋を嫌う。

8 花の定座はウラ十一、ナウ五、(二十韻ではナウ三)とし、引き上げることはあってもこぼさない。

9 恋は一卷に必ず出す。ウラおよびナオにそれぞれ一回出すのが普通である。二十韻ではどちらか一回でもよい。体言止めまたは用言止めの五連続を嫌う。

11 挙句は発句に返らぬよう特に注意する。

五 韻律

短句下七の四三および二五を嫌う。

六 仮名遣

歴史的仮名遣・現代仮名遣どちらでもよいが、その混用を嫌う。

ねこみの第二十一号
一九九五年十月号より転載

第十八回 藤祭奉納正式俳諧

奉納正式俳諧 二十韻

執筆を終えて

八代 嫺

次第

役割

- 一 席改め 宗匠 原田 千町
- 二 席入り 脇宗匠 佛淵 健悟
- 三 配硯 副宗匠 島村 暁巳
- 四 献花 執筆 八代 嫺
- 五 執筆呼び出し 知司 鈴木 了斎
- 六 文台捌き 副知司 鈴木美奈子
- 七 俳諧興行 副知司 林 鐵男
- 八 花前 座配 佐古 英子
- 九 玉串奉奠 座見 池田やすこ
- 十 花の匂披露 花司 中野 昌子
- 十一 端作り 配硯 鈴木千恵子
- 十二 吟声 同 式田 恭子
- 十三 文台返し 同 山本 要子
- 十四 作品奉納 老長 上月 淳子
- 十五 納硯
- 十六 挨拶
- 十七 退席

平成十六年四月二十一日
於 亀戸天神社

江戸情緒けふに伝ふや藤祭

撫牛の眼を開く春風

ブルベンに土の匂ひを確かめて

プリオツシュ焼く厨にぎやか

野外劇騎士白哲を月かげに

小鳥となりて胸に抱かれ

秋深むキリエレイソン君と僕

柱時計のねちを失くした

あくまでも湖水は碧く透き通り

眠れる嬰に万の螢を

四次元へ草矢を放つ日曜日

くるりくるりとメビウスの帯

櫻子とナポリの坂で屋台曳き

老いてほんとの愛を見た冬

ひと夜毎水柱は月に育てられ

卵物価の優等生とか

友あれば南へ北へ美酒酌まん

轆轤まはしてふくらみし夢

天平の乙女か花の下に佇つ

親しき山にかかる初虹

青木 秀樹

佛淵 健悟

林 鐵男

秋山志世子

青島ゆみを

鈴木美奈子

山寺たつみ

島村 暁巳

上月 淳子

中野 昌子

鈴木 了斎

池田やすこ

古賀 一郎

式田 恭子

紺野千寿子

鈴木千恵子

権頭 和弥

山本 要子

原田 千町

執筆

平成十六年四月二十一日満尾
於 亀戸天神社

執筆の役をお受けしたのは昨年四月末で
した。それを機会に季刊「連句」を読み返し
第一回の正式俳諧は昭和六十一年十月十五日
に興行されたことを知りました。

十七年後の同じ十月十五日に執筆を務める
のも何かのご縁と思ひ、第一回の

百歳の気色を庭の落葉かな 翁
を芭蕉忌の発句とさせていただきました。

第一回の執筆は中川哲さんで、その時の哲
さんの文に（興行に入る前、文台捌きまでの間
に一座の連衆に正式俳諧儀式列席への莊重な
気持と、作品創造参加への心の昂揚を醸し出
すように執筆は演技しなければ……）とあり身
の引き締まる思いがしたものでした。

今、役を終えての安堵感とともに型の伝承
だけで果たして良いのだろうかという疑問も
残ります。「付け」のやりとりにもっと比重
を置くべきではないかと。

昨年の芭蕉忌の前日には「嫺さん頑張つて」
との明雅先生のご伝言を奥様からいただき、
貴重な力となりました。その五日後に先生は
逝かれたのです。

この一年、先生はじめ身近な人との別れが
続きました。しかし、絶望の奥からも新たな
力は必ず湧いてくることを実感しています。

文台の手垢に月の涼しけれ 嫺

「恭遜や」

登坂かりん

捌

「藤浪を」

青木泉水

捌

「うら若き牛」

紺野千寿子

捌

恭遜やうすむらさきに藤丈けて

かりん

甲羅を干せる亀ののどらか

利子

雛の間のオセロゲームのきりもなし

久美子

たつぷりと濃く淹れるコーヒ

景翠

まゆ月に似た眉の女薄衣

三実

大汗かいて渡す付け文

鐵男

ぶうらぶら行こか戻るか思案橋

利

肖像権を問はる写メール

久

匙投げて国連頼みのブッシュユさん

同

こんな壺にもつける折紙

鐵

酉の市囃されつ買ふ大熊手

利

鮫鱈の骨吊るされたまま

翠

生国は肌なめらかな美人県

利

夜這いの星へ聴かす陸ごと

翠

立待も居待も過ぎて君の影

久

おとなき音の醸す中波

利

ロボットのタクト鮮やかシンフォニー

久

器用びんぼふ親譲りなり

利

花の蕊くるくる回る極楽湯

鐵

山峡のバス襲ふ春霞

三

藤浪をすかして風の渡るかな

泉水

音かろやかにめぐる姫虹

清子

春景色俄か絵描きの増ゆるらん

健悟

有名人のパイプ収集

英子

月代に祭囃のきこえきて

孝司

冷やし豆腐を生醤油で食べ

要子

特上の久保田万寿をおすそわけ

英

あげまんといふ噂ちらほら

悟

着流しですつきり決める優男

清

猫が居ついた船宿の土間

同

ふはふはと此岸彼岸を雪虫

悟

ピーターパンは紫煙燻らせ

司

ピリヤードきみのハートをキューで突く

要

自然著描ってよりの昂ぶり

悟

寝乱れし名残の蚊帳を覗く月

要

胡桃握った父のリハビリ

英

シネマ屋の夢を横切る榎葉機

悟

飛んだ帽子はどこへ行行ったか

清

繚乱の花に逢はむと五稜郭

司

蛙育てる街の過疎校

悟

うら若き牛も眠るや藤祭り

千寿子

柔東風の中渡る反り橋

下町

春の服あれこれ選びきりもなし

ふみ

得意科目は幾何と代数

忠史

棟梁の見守る大屋根月暑く

碧

白蟻の巣に足をとられて

豊美

諾ふも断るもまた辛きこと

町

そして私は負け組となる

碧

スーパリーに大売出しのチンドン屋

み

さっと飛び込む電話ボックス

史

討ち入りの日に金貸しに見つかって

美

厨のすみに吊す乾鮭

町

雑踏の凱旋門で一目惚れ

み

二科のモデルとなりし裸婦像

町

月照らすチエロ独奏の美しき

み

新走り酌むはらからの家

碧

念願の標準記録突破して

史

腰が治れば膝に肩にと

子

施無畏印御仏に散る花吹雪

町

早池峰山の農夫のどやか

碧

連衆 梅田利子 副島久美子 岩垂景翠

滝沢三実 林 鐵男

連衆 下鉢清子 佛淵健悟 佐古英子

伊藤孝司 山本要子

連衆 原田千町 中村ふみ 根津忠史

松本 碧 高橋豊美

「風の通り道」

大島洋子 捌

藤波やかすかな風の通り道 洋子
 心字が池を巡る春帽 秀樹
 遠足の持物残らず名を書きて やす子
 父の胡座の中にある猫 良子
 ニュータウン多摩丘陵に夏の月 華蔵
 アロハのシャツを粋がって着る 有子
 逢引は歌声喫茶例の席 良
 ゆれる思ひは苦き珈琲 蔵
 献金も賄賂もすべて藪の奥 樹
 自称はお取り名人の技 や
 屋敷神朝な夕なに酒供へ 良
 地球は昔スノーボールで 有
 埋火をほしくり返す同期会 樹
 老いては君と歩幅合はせる 良
 初月夜針目に糸の抜けるほど 樹
 小布施より来る栗の落雁 有
 本堂の北斎の絵に秋惜しむ や
 CGアニメバーチャルな夢 洋
 多言語で愛でる日本の花景色 有
 谷渡りする鶯の声 蔵

連衆 青木秀樹 池田やす子 本屋良子
 山田華蔵 佐々木有子

「藤の香り」

生田日常義 捌

襟元に藤の香りて逢瀬かな 常義
 交はず会釈にまどふはな蛇 孝子
 春炬燵細き絵筆の並ぶらん 恭子
 回覧板と玄関の声 たつみ
 水浅く野を歩みをり冬の月 澄子
 小膝を曲げてざざむしを捕る 丁那
 理科室の折々笑ふスケルトン 孝
 山高帽と長いステッキ 恭
 おもろうてやがてかなしき竜宮城 丁
 踊り子たちと場末相宿 み
 焼酎の瓶に蝮の悶々と 孝
 土用火を噴く桜島なり 丁
 辞書繰ればひよんな押葉が顔を出し 澄
 秋の便りを待ち侘びて病む 孝
 十三夜鼻緒の切れた君を抱き 恭
 もつてのほかを渡す祖母殿 み
 勲章を柱時計の横に掛け 恭
 ストラライブ・タイ少し緩めに 常
 楊貴妃の花の重さに雷兆し 孝
 少年僧の踏みし陽炎 澄

連衆 坂本孝子 式田恭子 山寺たつみ
 八角澄子 浅賀丁那

「藤いろの」

青島ゆみを 捌

藤いろの藤の揺るるや江戸言葉 ゆみを
 雛送りのすまぬ町役 和弥
 山笑ふ腰のひさごをかたむけて 志げ子
 走り書きするアトラスの隅 媛
 神殿の柱を冷やす蒼き月 弘子
 髪もおどろな羅の女 達子
 ある時は舌つたらずで拗ねてみる 媛
 北朝鮮のテーブルにつく 志
 このところ海辺を走るカメラマン 弥
 逃がした魚はいつも大きい 達
 着ぶくれて手当たり次第低位株 媛
 男ひでのりのダンス教室 弥
 国籍も年齢も越え愛しあひ 弘
 残る蛍に狂ふ接吻 弥
 月明りピエロと人魚沖眺め 達
 ヴイオロンの音に秋の限りを 媛
 これよりは諸礼停止と酒を酌み 弥
 夢で訪ふ五十三次 弘
 花人と呼ばれん行脚握り飯 志
 テニスボールの弾む若芝 達

連衆 権頭和弥 蒲原志げ子 八代 媛
 松原弘子 篠原達子

「風の色」

棚町未悠 捌

藤房や水面を渡る風の色

未悠

春を惜しみつ撫牛の傍

真呂

音合はせオーボエ奏者のどやかに

美奈子

はにかみながら子ども寄り来る

敬子

天窓の涼しき月に手を伸べて

あかり

暑中見舞と贈る一升

好敏

ぞつこんのキヤリアの彼女からくちで

奈

後朝の宿苦き悔恨

呂

刑務所でひたすら写す般若経

敏

みちのくの雪しんしんと降る

敬

蕎粥をアニメ「冬の日」観しあとに

呂

切れそで切れぬモンタージュなり

奈

おしろいがいたるところにくつついて

敏

わつと泣き伏す誰も居ぬ部屋

奈

長江の月に溺れし李太白

呂

もう眠たげに穴に入る蛇

り

うそ寒の砂重かりし兵の靴

奈

地図と磁石で探すファルージャ

り

山里の花を自慢の国訛

敏

初虹立ちて流る歌声

敬

連衆 木村真呂 鈴木美奈子 須賀敬子

中田あかり 豊田好敏

「晴れ渡る」

梅田實 捌

晴れ渡る空なごやかに藤祭

實

鎮もる池に亀の鳴く頃

文子

春興の和魂漢才集ふらん

政志

ベンチャー社長派手なネクタイ

一枝

慈善鍋札も入りぬ二三枚

淳子

心の闇を照らす寒月

千恵子

初めての優しいキスにめまひして

文

特別な曲彼の着メロ

千

新幹線九州縦断あと僅か

文

判例調べ選挙対策

政

柏餅味噌とあんこを取りっこし

淳

遠心力にかなぶんの糸

千

鍛へたるオリソニックの力瘤

政

草じらみ背に何処でつけたの

淳

高原の隠れ宿まで月を供

文

備前の盃で新酒まるやか

千

納ひ忘れいつの間やらからっぽで

枝

苦心惨憺読めぬ古文書

文

花に酔ひ人に酔ひたる通り抜け

淳

シャボン玉から園児現る

枝

連衆 橘 文子 峯田政志 西田一枝

上月淳子 鈴木千恵子

「風さそふ」

松島アンズ 捌

風さそふけふの藤浪連ね歌

アンズ

亀鳴く池にカメラ押す人

麻子

春コートカットラインの鋭くて

暁巳

胡麻塩ばらり炊きたての飯

美紗

野晒しの機関車座る寒の月

佳之子

メーテルに似し凍港の女

巳

酒の席恋のシナリオまた外れ

紗

人質事件次を恐れる

麻

御柱祭に命かける父

同

木っ端で作る佛千体

紗

町工場創意工夫で黒字増え

巳

夢ではないかホールインワン

之

タツ踏むピエロは象の親友さ

巳

化粧落せば若き眉あり

之

為朝の睦みし島に月の弓

麻

菊の宴もやきもちの種

巳

カーナビの途切れしあたり牧閉ざし

紗

ダム湖の底に眠る故郷

之

小学生課外授業の花見なり

紗

帽子の中に入れし子雀

之

連衆 内田麻子 島村暁巳 根津美紗

染谷佳之子

「智の神や」

横山わこ

捌

瀬川康男さんの歌仙

田中寿美

智の神やその名も床し藤祭

額づく肩をよぎる白蝶

行く春の水上バスを乗り継ぎて

団子ののれん外すたそがれ

月さして鬼女鴈たける新能

君にかまれし梅雨寒の耳

ベスピアス遺跡に印す交歓図

人はいつしか流木に似る

年寄りの炊く飯すこしやはらかに

環境循環勉強の会

鴨の群まあるくなって眠りたり

兎一家に赤児生まるる

DNA螺旋と螺旋からむ恋

あれがふたりの銀河記念日

ブーメランのやうな月見る山の端に

新絹で織る袖塩沢

般若湯ひそと澄みある庫裡の隅

柴折戸押して暮仇の来る

幼子の声良く通る花の下

夢に蛙が吹くシャボン玉

連衆 市野沢弘子 鈴木了齋 中野昌子

倉本路子 前田曜子

わこ

弘子

了齋

昌子

路子

曜子

昌

齋

路

昌

弘

齋

こ

路

曜

こ

齋

路

弘

昌

福音館から出ている「いないいないばあ」

という絵本は絵が瀬川康男さん、文章が松谷

みよ子さんでたくさんの子供たちに読まれて

いる有名な本である。いつか広告の世界でこ

の本に登場する猫を使いたいと温めていたと

ころ、今から二十年前、その機会はやってき

た。名古屋に新しく出来る全館子供向けの専

門店のオープニングキャンペーンを担当する

ことになって、イメージキャラクターに「い

ないないばあ」の猫を使うことを提案した

ところすんなり決まり、その猫はショップの

パスから新聞、ポスター、トレーナーにも登

場することになった。交渉が進み、いよいよ、

作者の瀬川先生と打ち合わせのために春まだ

浅い信濃路を尋ねた時のこと。名古屋から日

帰りは無理ということと先生に別所温泉おす

すめの宿をとっていただいた。打ち合わせを

終えたあと、先生ご夫婦に宿まで送っていた

だき、そこで夕食をご一緒にさせていただい

た。宿特製の冷やしたタマゴ酒の不思議な滑

らかさに酔い、酔うほどに話ははずみ、すぐ

近くにある信濃デッサン館に話は飛ぶうちに、

村山槐多の作った「一本のガランズ」という

歌を先生が歌ってくださいました。

話の中で当時の私はよくも知らないのに、

「いつか連句をしたいと思っています」とお

酒の勢いも借りて話したら、瀬川先生は、

「それはいいね」とおっしゃって、あとで一

冊の冊子を下さった。それは先生が連衆四人

で文音をされた歌仙「ふとり豆」で、序文、

あとがきも流暢な文語調で芭蕉翁を意識して

書かれており、装丁は手作りの徹底した遊び

心で作られた冊子であった。

いつか先生と歌仙を巻くことが出来たらと

いう思いは夢のまた夢。今日も忘れ者の私は

のほほんと風に吹かれている。(別所温泉で)

早春の湯殿でくしゃみひとつする

◇せがわ やすおプロフィール◇

一九三二年愛知県生まれ。一九八六年から長野県

青木村在住。一九六七年「ふしぎなだけのこと」(福音

館書店)で第一回世界絵本原画展グランプリ受賞。

一九八七年「ぼうし」(福音館書店)で第十回絵本に

つぼん大賞受賞。



紀伊国屋文左衛門ふたたび

船水暢子

徳川幕府五代將軍綱吉は「犬公方」として知られるが、寺院建立に熱心な將軍でもあった。上野寛永寺の根本中堂造営、池上本門寺の修復等に巨万の富を費やし、幕府財政の逼迫を招いた。新井白石の「折たく柴の記」によれば、時の勘定奉行萩原重秀はお蔵にある材木は用に立たないとして商人達から高値で良材を買い入れ、結果「材木をあきなふ商人共の、たちまちに、家を起して、某は幾十万を累ね、某は幾百万を累ぬといふもの、いくらといふ数をしらず」（正徳二年九月十一日条）ということになったという。

紀伊国屋文左衛門もこの時代「材木をあきなふ商人共の、たちまちに、家を起し」て大儲けした一人と考えられるが、その有名に比して実体の知られない人物とされる。前号で水谷氏も述べていたように、伝説・逸話は夥しく残る。しかしまとまった商業経営史料が残らない為、ほとんど歴史の上では実証できないとされてきた。が、近年竹内誠氏は、元禄五〜九年及び同十〜十四年の間、紀文が幕府の木材御用達商人として御用木仕出しを請け負い、駿州安倍郡の井川山で伐材、納木したことを報告している（『紀伊国屋文左衛門の実像』『徳川林政史研究所研究紀要』第三五号、二〇〇一年三月、徳川黎明会）。謎だ

らけの人物の足跡の一端が切り開かれたわけだ。

竹内氏は「宝永年間の中頃（宝永八年が正徳元年）には、材木商閉業への道を辿り始めていたものと思われる」とするが、このことは俳人「千山」の足跡からも窺うことができ。管見による限り千山の誹諧活動は元禄期には皆無だが、宝永元年の『五十四郡』（沾竹編）に「見せ菓子にかつらぎ山や東菊」と発句一を納めたのを嚆矢に、宝永六年以降俳諧活動が本格的になっていくからである。

宝永の中頃、即ち四年は俳諧史においては大きな年であった。芭蕉に「両の手に桃と桜」とされた蕉門の巨星其角・嵐雪が相次いで世を去ったのである。其角は二月二十八日、嵐雪は十月十三日没。千山は、『類柑子』に其角追悼句一、また七々忌追善百韻に一座し、嵐雪追善集『風の上』（百里編）にも発句一を手向け、嵐雪・百里・周竹の表六句を「手向に其句を拾」った三十吟にも一座している。四年、五年は其角・嵐雪の追善集ほか一、二書に名を見せるのみである。が、宝永六年になると、正月には長男千泉を編者として『注連繩』を上梓する。冒頭には「元日」として三つ物を掲げる。清流とは祇空の初号だ。

鳥をもて分間作者世になりて 清流

ほか、集には清流が得た慈恵僧正御夢想の句を立句に千山、千泉、次男の千江らの十吟や、江戸俳人達の発句を収録する。

更に千山はこの年八月、清流・沾洲・千泉と共に鎌倉へ放生会と流鏑馬見物にかけ（清流編『鎌倉紀行』）、翌七年は、五月には清流・仙鶴らと京都・大和を周遊（仙鶴編『十二月箱』）、七月は清流・沾徳・沾洲らと駿州島田にある連歌師宗長の旧庵を訪ねている（「於駿州島田塚本氏別墅俳諧表八句」）。このことは、恰も木材御用達としての紀文の役目が終わったことを意味するのではないかと御用があれば風流な旅行などしている暇はないはずだ。

宝永六年とは、正月に將軍綱吉が世を去り、六月には御用人柳沢吉保が隠居している。綱吉の常軌を逸した木材御用も、彼の死と共に終わったのである。

◆執筆者紹介 「紀伊国屋文左衛門ふたたび」の船水暢子さんは、東京都立大学大学院修士二年。主要論文「大場夢和年譜稿」（共編「都留文科大学学院紀要」六）

旧年疱瘡快癒たり

うつくしとゆふやしめ繩水若し

木芽の空に本扇たつ

十歳

千泉

千山

先日、まちづくりの仕事に関わる地元の人から、『おくのほそ道』によるまちおこしを提案しているという話を聞いた。舞台となる富山県滑川市は、漁業と配置薬業を主な産業とする、富山湾に面した人口三万五千人弱の市である。

『おくのほそ道』本文に滑川の名は登場しない。むしろ本文を見る限りにおいては、芭蕉は越中の地を足早に通り過ぎたと言ってもよい。一句残してはいるが、「一家に」の市振と「塚も動け」の金沢の間では印象も弱い。しかし滑川の人々にとってはそうではない。『おくのほそ道』の旅の補足資料として参照される『曾良旅日記』には、「申ノ下刻、滑河ニ着キテ宿ス」とあり、滑川で宿泊したことが判明している。この一文が『滑川の芭蕉』のすべてなのだが、昭和十八年に『日記』が紹介される以前から、地元では芭蕉が宿泊したという事実が伝えられていたらしい。はやく『滑川町誌』（大正三年）で触れられ、その宿についても考察が行われてきた。つまり滑川では、書かれていない部分、すなわち、芭蕉が宿泊したという事実も『おくのほそ道』の世界として受けとめられているのである。

芭蕉が滑川に足をとどめたことに着目し、江戸時代中頃に芭蕉の顕彰を行ったのが、地元滑川の俳人・川瀬知十である。知十は、戸

出の尾崎康工・福野の田中其汀とともに越中の麦林三羽鳥と称せられたという人物で、自ら『わせのみち』（宝暦十三年自序）を編んだ。『わせのみち』には塚供養の歌仙ならびに手向の発句、諸家の四季発句が収められるが、その序で知十は滑川を「批浦は芭蕉因縁の境」「爰は故翁遺雅の地」（「築塚の旨趣」）と位置づけ、現在も市内に残る徳城寺の境内に『おくのほそ道』所収の発句「早稲の香やわけ入右はありそ海」の句碑を建立した（当時徳城寺は海浜に面した場所にあったが、明治十三年、市内四間町に移転）。

芭蕉が死後、各地でさかんに顕彰されたことは、芭蕉の墓碑や句碑を案内した『諸国翁墳記』が、宝暦十一年の出版以来、幕末に至るまで増補され続けたことからもうかがえる。俳諧史の流れにおいて見れば知十の築いた碑はその一例と言える。しかし知十や滑川の人々にとっては唯一の出来事である。碑に刻まれた文字は今や判読し難いが、平成元年には元の碑の隣に新しい句碑も復元された。「それでも重ねて繰り返し返しておく。『奥の細道』の旅に芭蕉が滑川で泊ったということは特筆すべきことである」（『滑川市史』）という、滑川の人々の、芭蕉と『おくのほそ道』への思いがここでも知られよう。

地方における文芸史研究の中でも、とりわけ詳細な研究が進んでいるのが、江戸時代の俳諧の分野である。地方の人々の郷土に対す

る熱意が俳諧研究という分野に向けられてきた。滑川の例がそうであるように、熱意は現在も変わらずにある。学恩に敬意を表しつつ、今後は、地方俳諧を同年代的な流れの中で捉え、巨視的な視点に立った研究へと繋げることも必要となるだろう。

冒頭の話に戻って、滑川の場合、まちおこしの中心となっているのは市の商工会議所だそうである。江戸時代の俳諧は、商人を代表とする富裕な町人層によって支えられたという一面を持つ。彼らは実作者であり、時に業俳のパトロンでもあった。前出の知十（河瀬屋七代彦右衛門）も「街の組合頭を勤め、また藩から川力籠才許を仰せ付けられ」（『滑川市史』）た有力町人である。俳人知十は芭蕉を顕彰したが、そのことは同時に、芭蕉や俳諧を通じた郷土・滑川の顕彰でもあったとも言えよう。くだんの『おくのほそ道』計画は、アイディアこそ提出されたものの、その後棚上げ状態だという。知十の時代ではない今に今の事情があるのだからうけれども、商工会議所を中心とした『おくのほそ道』によるまちおこしというアプローチは、富裕な町人・商人らに支えられた俳諧の一面をしのばせる。芭蕉の、また俳諧そのものへの、一つの現代的な顕彰の形ではないかとも思う。

◆執筆者紹介 「俳諧の現代」の奥野美友紀さんは、富山大学非常勤講師。主要論文「本朝水滸伝」論―近世的歌物語の創造―（『江戸文学』）「綾足片歌説の享受―俳諧と和学と―」（『日本文学』）

杉並のこんな小さな薔薇屋敷

雨があげればうつつすらと虹

一輪車負けず嫌ひが懸命に

シュークリームは母の手作り

美術展ざつと観終り語らひて

思ひがけなく端正の月

楽しみはジパング倶楽部カシオペア

ねえねえばかり何が欲しいの

恋人の宣言をしてほっとする

ぴたりはまりし整体のつぼ

白っぽい上着せられ猿の芸

パズルゲームもオンラインから

寒月の寺に警策ひびきををり

雪海苔少し膳に添へられ

おほかたは売れ残ってる写真集

下町ブームで継ぎし草履舗

花筵寝ころぶ横にクレールン車

選挙演説春の夕暮

鶏合幼馴染みをにらみつ

生命線が何故か短い

広辞苑聖書と重ね枕頭に

西に東に残す城郭

豆菓子をきりなく食べる祖父なりき

オンザロックは氷柱砕いて

ホカロンの急なききめに驚けば

あんた知ってる背のほくろを

裏表をんな変幻また自在

最後の牌でつもる親満

十三夜つるはし振るふ峠道

雑木紅葉がひそやかに立ち

自販機の奥の奥からきりぎりす

稗田阿礼に記憶術真似

ブランドの鉢巻をして英単語

地下で乗り継ぎ中華街へと

心意気千年の花今開く

長き尾を曳き昇りゆく風

連衆 中林あや 近藤守男 間佐紀子

北村良輔

平成十六年五月十六日首尾

於 桃徑庵

和子忌

式田恭子

先日母が二十年前に巻いた酒恋歌仙を読み

ました。今の私とそう変わらない歳だったの

かと年月日を見て驚くばかりでした。明雅先

生、お仲間の方達との一巻はそれはそれは楽

しい作品です。母の句はおちゃめで陽気、若

さ(?)に溢れています。明雅先生発行の

「季刊連句」創刊号に、母の「連句との出合

い」という文がありました。文の最後に「い

ずれば何巻かの歌仙を巻きたいと願うもので

す」と書いていました。それから何巻いや何

百巻巻いたのでしようか。一巻ごとに新たな

喜びと冒険と発見があったことと思います。

これからは明雅先生の残された教えのもと、

母の連句にも思いを馳せ、勉強していきたく

と思えます。みなさまご指導のほどよろしく

御願いたします。命日に多数お集りいた

き、賑やかなことがなにより好きだった母は、

空の上から本当に喜んでいたらとおもいます、

皆様有り難うございました。

最後に、当日お捌き頂いた五人の皆様にお

より御礼申し上げます。

発句

住きひとの声あり雨の花石榴 健悟

素裕や安南日記文机 暁巳

賑やかがお好きでしたね花卯木 了斎

街騒の聞こゆ彼方に夏燕 鐵男

いちまいの切符となれり時鳥 美奈子

石楠花や詩ごころある割烹着 恭子

本当の顔

中田あかり

一

ハンガリーの首都ブタペストは、ブタ地区に王宮があり、ベスト地区に議事堂や、商業地や民家がある。ベスト地区を暫くのぼると「ジブシーの館」が茂りの中にあつた。

着飾つたジブシー達に迎えられ、素焼きの水筒型の壺が首にかけられた。これを一息に飲み干すことが友好の印である。私はそつと甘い酒をなめてみて、リボンのままペンダントのようにぶら下げた。

ジブシーは音楽の才能があるので、その方面の教育を受けさせていると館長の説明。楽しい宴が始まる。歌も踊りも楽器も巧みだつた。寸劇も笑わせた。観客も終りには一緒になつて大きな輪を作り踊る。中でも私達の仲間が日体大の出身で見事な動き方をして喝采を浴びた。倅せそうなジブシー達。

外に出ると思ひのほかドナウ河が近い。船でホテルまで帰つたが、ライトアップされた王宮やビルなど夢見心地であつた。

二

ルーマニアでは野菜が不足していると宮本輝の『ドナウの旅人』で読んだが、時代が変わつていた。トマトも、丈のつまつた胡瓜も美味しい。共産党時代は野菜をウクライナに送り、石油と交換していたので不足してゐたとか。その代わり、トラクターもトラックも

見かけず、畑を馬が耕し、二頭立ての馬力が荷車を引いていた。

ドラキュラの父上の城とは石橋で繋つてゐた。

「決して間をあげないで下さい。ジブシーに橋の上でつかまると大変ですから！」

土地の添乗員の真顔が私たちを真剣にした。口もきかず歩く。前後を添乗員二人がかためる。無事に城に着き、城壁を背にした記念写真はまだか眩しそう。城中の素堀の抜穴が中世を思わせる。素晴らしい景色が、国境の向うはコソボであることをわすれさせた。

ジブシー達は、かたまつたり離れたりして行き来を眺めている。

三

ブルガリヤのガイドは素適な人だつた。「奈良のナ、出ろのデ、亜細亜のアで、ナデアといひます」

誰が教えたのかしら。この美しい人に出ろなんて。皆で考えた。

「出ろというのは男言葉なので名詞で統一して電気のと説明なさつたらいか？」おせっかいなおばさんの提言にナデアはにっこりと頷いた。

首都ソフィアの駅前に膝を反対に折り、たらいのような桶に坐つて十八歳位の男がいた。男の前の箱には小銭が入つてゐる。赤ん坊の頃食べてゆく術として親に折られたのかしら？

私達は教会の方に向つた。ナデアは身構へた様子でジブシーの年嵩の男の子を呼び、幾ばくかの銭を握らせた。絶対に仲間を近寄らせないやうにと念押しをしてゐることが、身振りでもわかつた。流浪の民の甘やかなメロデーはもう頭の中から消えてゐた。

この国では聖人の肖像画をアイコンと呼び、教会にまつられてゐる。私達は色々と拝観し外に出た。教会は階段の上なたてられ、だから降るやうになつてゐた。後の方から悲鳴の子供達がかみかかっている。前にいたナデアが後ろに走り頭株の子に銭を渡し、離れるやう大声を出す。と水飲場の方から警官が三人駆けてきた。蜘蛛の子を散らすやうに逃げる子等。友人は腕や肩をつかまれて恐かつたと口々に。私はぼうつと五十年前を歩んでゐた。

昭和二十二年、日比谷公園野外音楽堂のベンチに仲良しと坐つてゐた。突然九歳位の子供がフランネルで私の靴を磨きはじめた。給与は四百円。逃げることも出来ず「十円分だけ磨いてね」といった。それでもまあ両足磨いて立ち去つた。お金は働いて得るものと親代々の血が教えたのだらう。あの子は物乞いではない。戦災孤児なのだ。おかれた場所では人は様々な生き方をしなくてはならない。私がブルガリヤで流した涙はこの一滴である。

ジブシーの乞ふ掌流浪の初夏をのせ

連句と出会う

吉藤一郎

ことの起りは、平成五年に「全国連句いなみ大会」を故郷富山県井波町で開催することになったことであつた。当時の井波町には連句の土壤がなかった。しかし芭蕉を追慕する志が篤く「翁塚」を造り詣でた瑞泉寺十一代住職「浪化」の、芭蕉入門三百年記念となれば、どうしても成功させねばならない事業であつた。

それには連句を町内に根付かせねばならない。幸いに俳句の会の全面的な協力によって、連衆の目算がついたが、指導者の見当がつかず困り果てていた時、この大会の後援をしていただいた新聞社の人から、「富山大学にいい先生が」といつて紹介されたのが、猫養の二村文人先生であつた。天の配剤とも言うべき出会いだつた。

最初私は、世話役だからという軽い気持ちで、町の例会に参加していた。というのも私は全くの無粋者で俳句は勿論、韻文とは無縁の六十数年の生活を送っていた。特に俳句は理解を絶するちんぷんかんぷんの世界であると思つていた。そんな私が連句の例会に参加したのだから、どうにも様にならなかつた。

転機が訪れたのは、最初の頃の例会のとき、私の付句を二村先生が大層褒めて下さったときからである。童話「手袋を買いに」の子狐

があわてて化けていないほうの手を出した場面を思い出して句にしたものだった。私にしたら苦し紛れに出してみたものだったが、俳句的発想とは無縁の句だったので、当時の連衆の刺激になったのであろう。大いに推奨していただいた。六十歳後半の老人でも褒められて嬉しい。「俺でも出来るのだなあ」との思いが、連句との出会いの本当の機縁になつたような気がする。

大会の当日は他の行事があつたりして、会場を離れていたのだが、ほんの暫く東先生の座を見学させていただいた。

拝見したところ、連衆にはベテランあり初心者あり、力のばらつきが目立った。先生はベテランの力を初心者に利用し、それでいて、双方ともに満足するような捌きをなさつておられた。それを見て、これが座の文学かと思ひ、私でも連衆の援助を得れば、座に加わることが出来るのだと強く感じた。連句との第二の出会いであつた。

このようにして、だんだん連句の面白みが分かつてきたあるとき、中学校で雑談をする機会があつた。その場で、私は座の文学としての連句の面白さについて話したように思う。時たまたま、地域と学校の連携や文化の継承などが強調された頃であることも幸いして、中学生にも連句を作らせてみたらと言う話になつた。

これまでの私の経験から、人間と人間の繋

がりの温かさや、ひとつのものを作り出していく協同の力を中学生に体験させるのも、今日の意味があると思つたので、希望者を募つて、連句の勉強を始めた。その二回生と勉強をしているときに、国民文化祭の連句会場に、井波町が指定された。多少冒険であつても、中学生に全国の人と席を同じくし、人との繋がりの広さや、連句の面白さを体験させてやりたいと思ひ、子供たちに諮つたら是非参加したいという。

内心私は、大会に参加した後の子供たちの反応が心配だつた。それは、「こんな難しいものはもう止めた」と言わないかという心配だつた。ところが終了直後寄つて来た参加者全員が、開口一番「次の勉強の日はいつですか」ときらきらした目で言つてくれた。私の心配は杞憂だつたのだ。

子供たちは大会参加を通じて、体験的に連句の面白さを感じたのだ。子供は正直なものである。彼らを惹きつける本物の面白さが連句にあつたのだ。私は改めて連句を見直した。これが私の連句との第三の出会いである。

以上のような私と連句の出会い、東・二村両先生を通して猫養との出会いでもあつた。性格とか感性とかは変わりようがないので、今後ももたつきながら皆さんの驥尾に付して歩みたいと思つている。どうぞ宜しく。

伊勢派散策④「成田蒼虬」 橋 文子
天明朝の褒貶を体現

天明朝は「今何がし庵、何がし亭とて、俳諧高名家の権を張る事、全く蕉翁の本意にはあらざるべけれど、是此道のさかんになりたる故なればなり」（梅通「舍利通語」と言われるように、この時代、俳諧は隆盛時代を迎えたが、俗化も著しかった。

成田蒼虬（一七六一—一八四二）久左衛門利定、通称彦助。金沢の人。寛政二年頃關更に師事。加賀藩士だったが、寛政六年、父が事に座し、知行没収、入牢獄死したので、武士を捨てて上京、關更を頼ったという。關更没後は芭蕉堂を継ぎ、芭蕉堂二世と称した。

ただし、南無庵の嗣号については、關更の未亡人得終尼と不和を生じ、尼自ら文台をたてて争ったと伝えられる。

桜井梅室、田川風朗と共に、天明三大家と称されるが、その平俗な句風は、後に、月並調として排撃された。

いつ暮れて水田の上の春の月
うぐひすの夕啼聞くや朱雀口
苺りあとのするどき篠やきじのこゑ
葉の花にくるりくるりと入り日かな
時鳥啼くや夜汐のひたひたと
江のひかり柱に來たりけさのあき
我たつるけむりは人の秋の暮
ものかげは常より暗しけふの月

鈴鴨の虚空に消ゆる日和哉
庭はけば掃ほど淋しあきの暮

（訂正蒼虬句集より）

「蒼虬句集」弘化四年刊の巻頭の「伝」に「発句の姿は青柳の小雨にたれたるが如く、付句は薄月夜の梅の薫れるが如くなど示されし、祖翁の骨髄を得て、後に天保の始めより処を設け、詞を飾るの弊風を改め、目前平話の正風をあらはし、諸氏の本懐を達し申されける」とある。平明自然を理想とした關更の句風を受け継ぎ、「炭俵」調を志向した。

天性大量、相貌雄偉の人であったが、句は優柔、繊弱が特色とも言われ、俳諧遅吟日本第一という有難くない称号も持つ。

天保五年には藏前の札差、守村抱儀に、路銀二百兩の大金をもって招かれ、暫く江戸に滞在した。

晩年は名声を恣にしたものの、良くも悪しくも、天明俳壇の実態を身を以て示したかの感がある。

蒼虬の後妻枝月尼の妹は、頼山陽の後妻で、三樹三郎の生母である。頼山陽は常に「俳諧は馬子唄」と放言していたが、蒼虬のは馬子唄と放言していたが、蒼虬の

修学院への御幸を拝し

御幸済みて松風秋をかへすなり

の一句を解し、「句は僅かに十七文字で、漢詩にも云ひ得られぬ妙味があり、誰にも会得せられる立派な文学である」と馬子唄の悪罵をやめたという。

歛の刃に童をのせて子を連れて
山をはなれぬ花前の雲
かすり矢を負はせた雁も帰るらん
膳いさらせてあかるみへ出る
棟梁をひとり残して月の客
藪の下まではまる秋水
梅室
蒼虬
室
虬

（梅室兩吟集）より

蒼虬は晩年、京都の八坂に対塔庵を結び、天保十三年三月十三日ここに没した。京都市東山双林寺に葬られる。

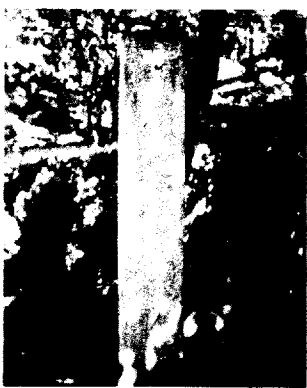
同じ東山の法観寺（市バス「東山安井」下車）境内、五重塔（八坂の塔）東側に

柴乃戸を左右部あ介て花能者る
蒼虬

と流麗な書体で刻まれた句碑が建つ。

（柴の戸を左右へあけて花の春）

婆一人かすんで居るや丘の家
さても律儀に穴出づる藁
蒼虬
文子



法観寺の蒼虬句碑

子規の見た蒼虬と梅室の発句

天明朝、ともに蘭更に学び、天明の名家と呼ばれる成田蒼虬と桜井梅室について、俳誌「ほととぎす」第十号（明治三十年十月）に「蒼虬と梅室とを比較して優劣を論ぜよ」という子規の試問があり、読書の応募を募っているが、難しかったためか次号の答は、子規自身を書いてある。子規は蒼虬、梅室それぞれの句集から各五十句を選び、佳句の多い方を勝るとしたのであった。

尚、その五十句中の「比較的佳なるものを撰援せん」と更に各十二句に絞っている。

蓬菜の橙赤き小家かな

蒼虬

臘月夜の更けてある九條かな

朝雉の走り下りけり二尊院

只二つ鴈は行くなり石部山

西院の梅正月毎に遠く見ゆ

夜は花に梟鳴いて東山

家毎に山吹散るや桶の水

鶏の親子涼しや麻の中

猶寒し茨棘の中の日はしり

寒月の加茂にも一つ小家かな

砂清し時雨過ぎ行く花表先

散る紅葉裏葉がちなる日和かな

椿落ち鶏鳴き椿又落る

梅室

我思ふ人は落ちにきくらべ馬

人もなき蚊帳に日のさす宿屋かな

川越しに見えつ蚊帳つる真裸

等閑に牡丹提げけり僧の供

月の雲鶴はなしたるけしきかな

足もとに雨吹き起る紅葉かな

日暮るるに風吹くに磯の鶴

枕より水鳥高し浦の宿

雪散らし散らし寝に入る杜の鷺

雪持ちて水にひたりぬ淀の家

海苔柴や遠浅かけて雪の花

子規は梅室は蒼虬に勝ると断じている。しかし、「卑野なる意匠と卑野なる語句とは実に二人の本色なり」と手厳しい。

春夏秋冬 各五句

柴の戸を左右へ明けて花の春

蒼虬

日永しとひとり思ふや鳩の声

いつ暮れて水田の上の春の月

鐘の声田一枚づつ霞みけり

山水や桜やしなふ夜の音

橙がこけてもをかし春の宵

梅室

紙雛の契りは深しもたれあひ

春風や杭のかしらに鳥の飯

日は西に梅ほるほるとこぼれけり

陸尺の大袖振って花見かな

ぬくもりは臥猪の跡か時鳥

蒼虬

清滝や夢のやうなる蟬の声

卯の花と共にぬるるや垣の幣

卯の花の卯月は同じ山家かな

涼しさや根笹に牛の繋がれて

短夜や玉江の芦の一嵐

六月の空を冷すや天の川

乳を隠す泥手わりなき田植かな

時鳥なくや屏風の寒山寺

撫子のあはれにつよし一の谷

人一人田中に立ってけさの秋

名月の汐に濡るるや人の裾

鴨川の上に都の天の川

蟹が子の折檻すんで萩の声

萩の声星は通ふに違ひなし

稲妻のしばし流るる大河かな

この頃は書月のある紅葉かな

秋風の盡きて波なし九月盡

秋暑き中立ち切つて水寒し

攝待にやとはれたまふ佛かな

沖中や鳥の浮寝に夕明り

上京は似た人多き紙子かな

炭竈や夜の心を富貴にす

行く雲の家より低き枯野かな

桐の実の落つる頃なり厚氷

霜白し草枯れかねて草の庵

冬の夜や針うしなふて恐ろしき

むしろ戸を開けても鳴くや沖の鴨

魚棚やかくふつばかり藁敷て

嵯峨山の夕日に干すや張り火桶

梅室

蒼虬

梅室

事務局便り

ご挨拶 東 郁子
「安曇野は昏れて紫」夫東明雅のすばらしい追悼集を製作して戴き、有難うございました。お心籠る追悼文・弔句を戴き、心から御礼申し上げます。編集ご担当の皆様、格別のお心遣いに深く感謝申し上げます。

訃報

六月二十三日 前猫糞会副会長で、長年朝日カルチャリーの講師を務められた秋元正江様が亡くなりました。謹んでご冥福をお祈り致します。

◇猫糞会十月例会・俳諧芭蕉忌

日時 平成十六年十月二十日(水)
十一時半から十七時
(受付十一時)
場所 江東区芭蕉記念館
正式俳諧終了後 二十韻興行

◇同人会推薦者紹介

中村ふみ 鈴木美奈子 百武冬乃
花巻珠枝 関口靖子 棚町未悠

◇新会員紹介

前田曜子

◇熱田神宮奉納百韻は、次の四巻です

土良の会 代表 林 鐵男
神楽坂連句会 代表 倉本路子
緑華亭連句会 代表 坂本孝子
源心庵の会 代表 篠原達子

◇猫糞会十六年度当番幹事

中村ふみ 鈴木美奈子 百武冬乃
花巻珠枝 関口靖子 棚町未悠
(任期は総会終了後次回総会まで)

◇猫糞発展基金にご協力有難うございます。

八代 嫺様 一万円
青島ゆみを様 五千円
内田素舟様 三千円
基金の口座 みずほ銀行新宿西口支店 普通3376045
猫糞基金

新刊紹介

矢崎藍著『付け句恋々』中日新聞社
タイトルから「連句恋々」を思い出される方も多いでしょう。今度の本は、この五年の間に、中日新聞・東京新聞に連載した「付けてみませんか」から、コラムと付け句を抜粋し、単行本として読めるように大幅に書き直したものです。取り上げているのは、恋句は勿論、生活句、時事句あり、付けた人は七歳から九十歳まで。中国や韓

国の人もいる、という大変な広がり。それを「めぎつね」藍さんが独特の語り口で楽しませてくれます。「あ、そうだ連句しよう」と入門される方、マンネリ沈滞ムードを打破しようとお考えの方、どのページを開いても、お役に立つのではないのでしょうか。

訂正とお詫び

前号で文字の間違いがありました。ここにお詫びして訂正いたします。

十一頁 入島宣言 → 入島制限
十三頁 民族風習 → 民俗風習
十三頁 辿りつく → 縋りつく

編集後記

盛夏の候 盛夏の候
松本碧さん、生田日常義さん 事務局とご兼任での「猫糞通信」編集、有難うございました。

今号より私どもが引き継がせて頂きます。宜しくお願い申し上げます。

季刊 『猫糞通信』第五十六号

発行人 猫糞会 青木秀樹

〒182-0003

東京都調布市若葉町

二二二一十六

編集人 橋文字 棚町未悠 林鐵男